

名古屋男声合唱団 団内誌



Agora

第 35 号



2025. 9. 21

◆ 第 35 号目次 ◆

新たな曲作りを目指して

◆ ハンス・アイスラー略歴と曲目解説

T2. 松本茂生

— 1 —

ハンス・アイスラー Hanns Eisler

1898年7月6日 - 1962年9月6日 (64歳没)

ドイツの作曲家。ライプツィヒ生まれ、ユダヤ人。

若くして新ウィーン楽派のアントン・ヴェーベルン、アルバン・ベルクとならぶ、アルノルト・シェーンベルクの三人の高弟のひとりとなるが、音楽上、政治上の対立から訣別。次いで、労働運動、共産主義運動に目を向け、劇作家ベルトルト・ブレヒトと協働するようになり、演劇や映画関係の歌曲を数多く残す。こうして、現代における音楽の社会的機能をきわめて真摯に考察した、音楽上の思想家となった。

ナチス台頭で米国に亡命して難を逃れ、ハリウッドでは映画音楽などでチャールズ・チャップリンらに協力。第二次大戦終結後マッカーシズムで共産主義者の疑いを受け国外追放となる。ベルリンに戻り、ふたつのドイツのうち、ためらわず東ドイツを選んで居を定め、偏狭なスターリニズムと闘い、あるいは妥協しながら独自の音楽をつくる。東ドイツの国歌『廃墟からの復活』の作曲者である。



生涯

第一期：音楽修業のあゆみ（- 1924）

1898年7月6日 ライプツィヒ生まれ。独学で音楽を学びはじめるが、やがて第一次世界大戦のハンガリー戦線から帰還してのち、ウィーンのユニヴェルザル出版 (Universal Edition) の校正係をつとめる。

1919年から1923年までアントン・ヴェーベルン (Anton Webern)、アルバン・ベルクとともにアルノルト・シェーンベルクに師事する高弟となり、1925年からベルリンで曲作り、音楽指導の生活に入る。新ウィーン楽派の作曲家としての道を歩む。

第二期：ブレヒトとの協働（1925 - 1932）

ブレヒトとアイスラー

1926年、アイスラーは同じユダヤ系で師匠のアルノルト・シェーンベルクに手紙を送りつけ、弟子であるにもかかわらず師匠を破門、ドイツ共産党入党。これには師の十二音技法が民衆の求めるものから乖離しているという音楽上の理由とシェーンベルクが君主制支持の反民主主義者であるという政治上の理由があったとされる。

シェーンベルクの指導による初期の批評的な音楽から、ジャズに影響を受けたシンプルな形式の曲へとスタイルを変えていく。作曲する曲はマルクス主義を反映した政治的なものが多くなり、ベルトルト・ブレヒトと協働、ブレヒトが作詞した曲を書くようになる（たとえば、『処置』や『母』など）。こうして新ウィーン楽派から離れ、以後は独自の道を歩むことになる。

この時期に作曲された、もっとも規模が大きい曲は1935年から1957年にかけて書かれた『ドイツ交響曲』で、反ファシズム抵抗カンタータとなって結実する。この作品はこんにちにいたるまで、ほとんどひとに知られることなく、また、演奏されることの少ない曲のひとつであった。しかし、ここ十数年の間に相次いでCDが発表されるようになり、知名度が高まってきている（[1]、[2]など数多い）。

第三期：米国亡命生活（1933 – 1947）

1930年代のはじめ、アイスラーの活動はナチスによって禁止され、1933年からソ連、パリ、ロンドン、ニューヨーク、プラハ、モスクワなど各地で精力的に講演・演奏旅行や音楽監督をこなす。

1938年に米国へ移住（亡命）したアイスラーは、チャールズ・チャップリンの音楽顧問を引き受けるなど、映画音楽の企画・作曲の仕事に従事。『死刑執行人もまた死す』と『孤独な心（英語版）』（None But the Lonely Heart）[1] でアカデミー賞にノミネートされた。

第四期：国外追放で東独へ（1948 – 1962）

1947年、ハリウッドで下院非米活動委員会（House Committee on Un-American Activities – いわゆる赤狩り）の喚問・審問を受け、共産主義の支持者との疑いで1948年、米国から実質的に国外追放となった。ヨーロッパに戻ったアイスラーは、ためらうことなく東ドイツに居を定め（ちなみに、ブレヒトはオーストリアに定住した）、東ドイツの国歌『廃墟の中から甦り』（『廃墟からの復活』とも訳される）や劇場音楽、映画音楽、テレビ用音楽を手がけ、労働者合唱団を指導。この時期のアイスラーの曲は主にヨハネス・ベヒャーの詩につけられたものが数多い。

1955年、アラン・レネ監督によるアウシュヴィッツのドキュメンタリー映画『夜と霧』で音楽を担当。1962年9月6日、ベルリンで死去。64歳（死因は不明）。現在ベルリンには、彼の名を冠したベルリン・ハンス・アイスラー音楽大学（Hochschule für Musik „Hanns Eisler“ Berlin）がある。

代表作

『処置』（Die Massnahme, 1930）

『母』（Die Mutter, 1931）

『連帯の歌』（Solidaritätslied, 1931年）

『統一戦線の歌』（Einheitsfrontlied, 1934年）

『ドイツ交響曲』（Deutsche Sinfonie, 1939年）

映画『死刑執行人もまた死す』（'Hangmen Also Die', 1943年）の音楽

ドイツ民主共和国国歌『廃墟の中からよみがえり（廃墟からの復活）』（1949年）

映画『夜と霧』（Nuit et brouillard, 1955年）の音楽

とりわけ『統一戦線の歌』と『連帯の歌』はスペイン市民戦争（Spanish Civil War）で各国から馳せ参じた義勇兵に唱われ、世界中に伝わったため、独立運動や労働運動の中で歌われるいわゆる革命歌として、いまでも世界的に愛唱される曲となっている。

（以上、Wikipediaより。高橋昭弘さんまとめ）

今回取り上げる曲（練習した順番に）

子どもの国歌（子供の賛歌：KinderHymn とも）

（原題：Anmut aparet nicht noch Mühe（恵みは惜しません）/KinderLied（童謡）1949年*）

『子供の賛歌』は、ベルトルト・ブレヒトが1950年に書いた詩で、雑誌『ジン・ウント・フォルム』1950年6号に初掲載された。同年秋にハンス・アイスラーによって曲が付けられた。『子供の賛歌』は、長い中断の後、ブレヒトとアイスラーが再びタッグを組むきっかけとなった童謡集の6曲のうちの1曲である。後に、レオ・シュピース、フィデリオ・F・フィンケ、クルト・シュヴァーンによっても曲が付けられた。

*注：元楽譜には1949年の表記があるが、この経緯からすると1950年が正しいかもしれない

IMSLP（パブリックドメインの楽譜サイト）では4曲の楽譜が上がっている

当初『讃歌/祝祭の歌』という題名だったブレヒトの詩の着想は、1950年4月15日のベルリンでの集会でコンラート・アデナウアーが『ドイツ歌』の3番をデモ行進で歌わせようとしたことに遡る。ブレヒトは、第一次世界大戦と国家社会主義によって堕落したと考えていた『ドイツ歌』に対抗するものとして、意図的にこの賛歌を書いた。3番で、彼は『ドイツ歌』の次の詩節をほのめかしている。「他民族の上ではなく、下でもない、我々はなりたいのだ」（『ドイツ歌』では「ドイツ、ドイツよ、何よりも上、世界のすべてよりも」）、「海からアルプスまで、オーデルからラインまで」（『ドイツ歌』では「マース川からメーメル川まで、エッチ川からベルト川まで」）。

児童歌の4つの詩節のうち2つを1つにまとめると、その韻律は「ドイツ歌」の韻律と完全に一致し、東ドイツ国歌の韻律とほぼ一致します。したがって、3つの歌詞はすべて、他の歌詞のメロディーに合わせて歌うことができます（東ドイツ国歌の詩節の終わりがわずかにずれる点を除けば）。

しかし、この児童歌は、1949年10月にドイツ社会主義統一党（SED）の委嘱により作曲されたヨハネス・R・ベッヒャーの東ドイツ国歌（Auferstanden aus Ruinen）の歌詞に対応するものもある。ブレヒトの歌詞は、内容に多少の言及はあるものの、ベッヒャーの哀愁漂う表現とは対照的であり、簡潔ながらも正確に選ばれた言葉遣いとなっている。

政治学者のイリング・フェッチャーは、この児童歌を次のように評した。「…これほど美しく、これほど合理的に、これほど批判的に祖国への愛を正当化する国歌はおそらく他になく、これほど和解的な歌詞で終わる国歌も他にはないだろう。」

「良きドイツは繁栄する」というフレーズは、1960年にDEFAのプロパガンダドキュメンタリー映画のタイトルとして使用されました。

この曲の冒頭の詩「Grace spares no effort」は、長編ドキュメンタリー映画『The Children of Golzow』の1979年の部分のタイトルであった。

1990年のドイツ再統一の時期には、いくつかの市民運動や様々なメディアが、児童の歌を新しいドイツ国歌とするためのキャンペーンを展開した。シュテファン・ハイムは、1994年11月に行われた第13回ドイツ連邦議会の開会式でこの歌を引用した。ペーター・ゾーダンも、2009年の選挙で左翼党から連邦大統領候補に指名された直後に、児童の歌をドイツ国歌として支持する声を上げた。

2015年、スイスの哲学者エルマー・ホレンシュタインは、この児童歌をスイスの国歌として採用する可能性を探るため、改訂を加えた。彼は第2節を削除し、いくつかの用語の置き換えを含む調整を加えた。このバージョンは、ロルフ・ケッペリの2021年の小説『リュトリの

旅の終わり』の中で文学作品として採用された。この小説は1944年のスイスを舞台としており、ここではスイス連邦建国の伝説的な地であるリュトリで勇敢な幼稚園の先生によって朗読されている。

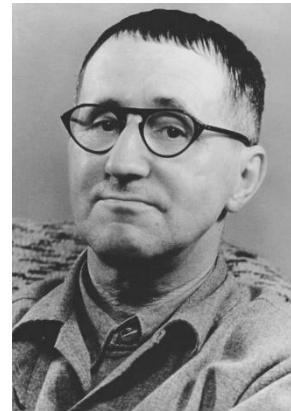
(Wikipedia ドイツ語版より機械翻訳)

連帯の歌 (Solidaritätslied 1931年)

『連帯の歌』 (Solidaritätslied) は、ベルトルト・ブレヒトが1929年から1931年にかけて作詞し、ハンス・アイスラーが作曲した革命的な労働歌である。この歌は、世界恐慌、第一次世界大戦、そして産業革命によって引き起こされた社会問題を背景に書かれており、ブレヒトの1932年の映画『クーレ・ヴァンペ』でもこの歌が使用されている。

歴史

この歌詞には2つのバージョンがあり、どちらもブレヒトによって書かれたものです。よりよく知られているのは、スペイン内戦中に書かれた後者のバージョンで、より抽象的でイデオロギー的です。前者は映画『クーレ・ヴァンペ』とより密接に結びついています。1932年、この歌は複数の労働者合唱団の共演によって初めて演奏されました。ワイマール共和国の最後の数か月間、特にスポーツイベントで急速に広まりました。



構造とスコア

原典は次の詩で始まります。

Kommt heraus aus eurem Loche、宿泊施設と呼ばれる
das man eine Wohnung nent。 穴から抜け出し、
Und nach einer grauen Woche 灰色の週の後に
folgt ein rotes Wochenend! 赤い週末が続く

アイスラーの編曲では、「Solidarity」という単語の最初の4音節は同じピッチ（下属音Gマイナーコードの上の「D」）で繰り返され、最後の音節は半音（半音）低く、属音Aメジャーコードの上のC♯で歌われます。曲の最後の4小節はこのコードチェンジを繰り返し、より自然な主音への回帰ではなく、属音で終わるため、曲の終わりは音楽的にも歌詞的にも開かれたものとなっています。

Wessen Morgen ist der Morgen, 明日は誰の明日なのか、
wessen Welt ist die Welt? 世界は誰の世界なのか？

メロディーはバッハのモチーフに沿っています。4つの音符は1、2、5、6小節で聞こえ、9小節と10小節の「D」と「C♯」がこのシーケンスを継続します。

(Wikipedia 英語版より機械翻訳)

編曲について

今回取り上げた編曲は戸島美喜夫氏(1937-2020)によるものであるが、その構想はキラパジュン (Quilapayún) のアレンジをコピーしたものと考えられる。最初#1～#3はゆっくりとしたテンポで歌われ、#4以降はアイスラーの原曲 (MarcshTempo) で歌われる(松本付記)

マイクに贈る石炭 (Kohlen für Mike 1930年) Op35-1

この詩は1926年に執筆され、同年5月23日付の「フォッシシェ・ツァイトゥング」紙に掲載されました。ブレヒトは1939年にこの詩を「スヴェンボルガー詩集」に収録しました。出典はシャーウッド・アンダーソンの小説『貧しい白人』(ライプツィヒ、1925年、252~253ページ)です。詩の中でマイク・マッコイは線路作業員とされていますが、献辞ではブレーキ作業員とされています。この混乱は、小説では線路作業員が腐りかけた枕木を柵越しに投げたと描写され、ブレーキ作業員が夜間に石炭を投げたと描写されているのに対し、この詩では石炭投げに簡略化されていることに起因していると考えられます。

4つのスタンザで、この短いエピソードは一人称の語り手によって実際の出来事として語られています(「私は聞いた…」、第1節)：(1) 未亡人のマッコイはオハイオ州で貧困の中で暮らしていた、(2) ブレーキマンが夜、「マイクに」と捧げる叫び声とともにフェンス越しに石炭を投げていた、(3) その女性が毎晩石炭を拾っていた、(4) で、なぜ彼女が今でも夜にこれを続けていたのかが説明され、(5) で詩の献辞が述べられています。

行間と、時折見られる節の配置の特異性(例えば、第2節の倒置、第5節の副詞句「in Armut」が文の後に置かれていること、第7節の述語「Thre」が副詞的位置に配置されていないことなど)のみが、物語の出来事を詩へと変容させている。行間は、時に意味的に重要なフレーズを強調する。例えば、「Für Mike」(第10節)、「den Kohleklopfen」(第16節)、「nicht Vergessenen」(第18節)、そしてとりわけ「Für Kameradschaft」(終わり)などである。

この詩は、ブレーキマンたちの労働者としての英雄的行為を際立たせている。貧しい未亡人(社会的な状況、文学的なトポス、列王記上17章、そしてより頻繁に、下記参照)は、「マイクのために!」(10節)という叫び声とともに、亡き夫に違法に石炭を配給される。第3節で、語り手はこの出来事について同格的にこう述べている。「ブレーキマンたちからマイクへの贈り物。死んでいるが/忘れられない」。名詞「贈り物」は贈り物の質を表し(盜難という事実は曖昧にしている)、宛先「マイクへ…」は実際には彼らの行動の理由を述べているが、宛先は実際には未亡人である。2つ目の属性「死んでいるが/忘れられない」は、ブレーキマンたちと同僚との搖るぎない連帯感こそが、彼らの行動の真の理由であることを明らかにしている。4節では、「世の目」(20節)が排除の基準として言及されています。世の目は出来事の中に盗みしか見ませんが、心の隠された目は連帯感を見ます。『星の王子さま』でお馴染みのこの区別は、聖書にも根拠があります。「人は外見を見るが、神は心を見る」(サムエル記上 16:7)しかし、聖書の外でも、法的に有効なことと真に正しいことの違いは、死者の裁き(エジプト、プラトン)という概念や、目に見えない心、つまり正義という概念の中で確立され、維持されてきました。

論理的に言えば、この詩は第5節で「同志たちへ…同志愛のために」と献辞を捧げている。アデルングの辞書は「同志」または「comerad」を「日常生活においてはルームメイト、より広い意味では職業や生活様式を共有する人」と定義している。しかし、これは同志愛の感情的または倫理的側面を捉えていない。ドイツ語デジタル辞書(DWDS)によると、同志とは「生活環境を共有することで、特に一緒に学校に通ったり、一緒にゲームをしたり、一緒に軍隊に所属したりすることで、互いに密接に結びついている人」であり、同志同士の強い絆を強調しているため、この定義はより正確である。ドルンザイフ語義群では、「同志」は「助け合い」や「友情」などの項目に分類されている。 Wikipediaでは次のように説明されています。「同志愛(イタリア語の *camerata*、「友人の共同体」に由来)とは、性的指向のない人間関係を指し、かつては主に男性の間で行われていた集団内の連帯感を意味します。(2012年12月26日公開)この連帯感は労働組合の根底にある理念であり、階級闘争の前提条件でもあります。したがつ

て、ブレヒトにとって、眞の連帯感や同志愛のメッセージはすべて、『年代記』(『スヴェンボーの詩集』の一部)に残されるべきメッセージでした。

(出典：<https://norberto42.wordpress.com/2012/12/26/brecht-kohlen-fur-mike-analyse/>)

訳詞について

本曲の日本語訳はブレヒト研究の第一人者であった岩淵達治氏(1923-2013)によるものである。第32回名古屋大学男声合唱団演奏会でも取り上げられ、氏の多大なる協力なしにはこのステージは成立しなかった(と松本は考えている)

凍死した兵士たち(Die erfrorenen Soldaten 1930年) Op35-2

(松本注)曲についての解説が見つからなかったので作詞者:カール・クラウスの解説を掲載します

カール・クラウス(Karl Kraus, 1874年4月28日 ボヘミア・ギッチン Gitschin(チェコ・イチーン Jičín) - 1936年6月12日 ウィーン)はオーストリアの作家・ジャーナリスト。モラヴィア出身のユダヤ人。ウィーン世紀末文化の代表者。

1899年、闘争的な評論雑誌「Die Fackel(火('炬火'とも))」を創刊、編集を行う。同誌は1912年以降はクラウスの個人誌となり、彼が亡くなる1936年まで中断を挟みつつも刊行が続けられた。権力や社会、文化に対する辛辣な批判と笑いによって、当時のウィーンに大きなインパクトを与えたとされる。

風刺的な時代批判を含む詩・随筆などは、厭世観を示すともいわれる。1922年刊行の全5幕の戯曲『人類最後の日々』は、第一次世界大戦を当時の資料に基づいてドキュメンタリー風に再現したもので、現代政治・寓話劇の先駆的作品の一つとなつた。本作にはハンス・アイスラーが曲を付けたが、あまりに長大なため完全な形で上演されたことはない。1933年にはナチスを批判する『第三のワルブルギスの夜』を完成したが、生前は極一部の発表に留まり、出版は死後の1952年となった。

執筆活動と共に公開朗読会を開き、その回数は700回に及んだ(ごく一部は録音されて今日に残されている)。

1936年2月、自転車にはねられたのが元で体調を崩し、通算700回目の朗読会を開いた後に心臓発作と脳障害で死去。ウィーン中央墓地に埋葬された。「火」は、事故直前に刊行された922号が最終号となつた。

(Wikipedia日本語版より)



農民の反乱(Bauernrevolution 1928年) Op14-1

農民の反乱については作詞者等の情報が不明なため、モチーフとされる「ドイツ農民戦争」について説明する。

ドイツ農民戦争(ドイツのうみんせんそう、独: Deutscher Bauernkrieg, 英: German Peasants' War)は1524年、主にドイツ南部・中部の農民が起こした大規模な反乱。

概要

この反乱の代表的指導者はトマス・ミュンツァーであったが、次第に急進化し社会変革を掲げるようになった。そのため社会制度に対して保守的なマルティン・ルターは始めこの反乱

を支持していたものの、鎮圧の側に回り、反乱は最終的に鎮圧された。このためこの地方の農民からルター派は支持を失い、以後カトリックが主流となる（→文化闘争）。

一方ルターが保守的であることを知った領主階級はカトリック教会を通じて支配体制を強化しようとするカール5世への対抗の必要上、ルター派を支持するようになった。

（Wikipedia 日本語版より）

（松本補足）

農民戦争について語りだすとそれこそ本が1冊（どころか数冊）書けてしまうので、ここでは川口さんに訳していただいた逐語訳をもとに、キーワードとなる言葉を解説していく。これとともに音符に合うように歌詞を当てはめた。楽譜の歌詞と見比べていただくと違いが分かって面白いのではないかでしょうか？ 少々意訳、超訳もあることをお許しいただきたい。

Bauernrevoltion Op. 14-1

Hei a ho ho!
Wir sind des Geyers schwarzer Haufen.
Und woll'n mit Tyrannen raufen!
Spieß voran, drauf und dran!
Setzt auf's Klosterdach den roten Hahn!
Kyrie eleison.

Wir woll' n den Herrn im Himmel fragen,
ob wir die Pfaffen können tot schlagen!

Setzt auf's Klosterdach den roten Hahn!
Als Adam grub und Eva spann,
wo war denn da der Edelmann?
Jetzt geht es auf Schloß, Abtei und Stift!

Uns gilt nichts als die heilige Schrift!

Uns führt der Florian Geyer an,
trotz Acht und Bann.
Fürt den Bundschuh in der Fahn',
Hat Helm und Harnisch an.

Geschlagen ziehen wir nach Haus!
Unsre Enkel fechten's besser aus!

Spieß voran! Drauf und dran!
Setzt auf's Klosterdach den roten Hahn!
Wir sind des Geyers schwarzer Haufen
und wollen mit Tyrannen raufen, !
Ohe!

農民の反乱

ハイ ア ホー ホー！
我らはガイヤー^{*1}の黒部隊、
そして暴君と闘うのだ！
槍を前へ、前進だ！
教会屋根に赤雄鷄印^{*2}を掲げよう
キリエ エレイゾン！（主よ、憐み給え）

^{*3}天に在します主にお尋ねします。

我らは司祭を打ち殺（倒）せるでしょ
うか？

教会屋根に赤雄鷄印を掲げよう
^{*4}アダムが土を掘りイヴが淫いでいたとき
貴族の奴はどこにいたんだ？

いまこそ城と修道院と教会に向ってい
る
我らには聖書ほど大事なものはないの
だ！

フロリアン・ガイヤー^{*1}が我らを導く、
追放や禁令に逆らって。
旗にブンツシューフラント^{*5}を掲げ、
兜と鎧を身に着けて。

敗れて我らは家に戻る！
我らの孫たちがよりよく闘うだろう！

槍を前へ、前進だ！
教会屋根に赤雄鷄印を掲げよう！
我らはガイヤーの黒部隊、
そして暴君と闘うのだ！
オーエ！

キーワード解説

*1 ガイヤー：フロリアン・ガイヤー (Florian Geyer)

農民戦争で農民の側に立って戦った貴族。

1524年にドイツ農民戦争が勃発すると、フロリアン・ガイナーは少数の下級騎士と、急ごしらえの農民民兵数百名と共に黒中隊（しばしば黒軍団または黒帯隊と呼ばれる）を結成した。これはヨーロッパ史上、農民革命側で戦った唯一の重騎兵師団であったと言えるだろう。黒中隊は戦場で帝国騎士団とプロテスタント騎士団を封じ込め、説教師トーマス・ミュンツァーとその歩兵隊がチューリンゲンで連勝を収めることを可能にした。ガイナーは剣の刃に「十字架も王冠もない」という言葉を刻ませたと伝えられている。大聖堂や城の無差別破壊、そして領主や司祭の即決処刑は、あらゆる勢力から彼の功績とされている。これらの破壊行為は、マルティン・ルターが諸侯の側に立って、反乱を起こした農民を虐殺するよう要求するきっかけとなった。最終的には敗走し刺殺された。

(Wikipedia 英語版より抜粋)

*2 赤雄鶏印

雄鶏のとさかは赤い→炎を連想させる→教会の屋根に火を放て（とした）

*3 天に在します・・・

農民戦争の際、農民側が使ったスローガンとされる

「天に在します主にお尋ねします。 司祭たちを打ち殺していいですか」

*4 アダムが土を掘り・・・

これも農民側のスローガンとされる

「アダムが土を掘り、イヴが紡いでいたとき 貴族なんてどこにいた

→そんな頃には貴族はいなかった（反語）」

*5 ブンツシュー運動

ブンツシュー (Buntschuh) 運動とは、中世末期から16世紀初頭にかけて、ドイツ・イス・南西ドイツで発生した、領主権力の強化に対抗して行われた農民の一揆運動です。長い革紐のついた農民靴を意味し、それが一揆の旗印となつたことからこの名前で呼ばれました。この運動は、後の「ドイツ農民戦争」の先駆けとなつたものである
(AIによる解説)